



中澤小智子（なかざわ・さちこ）は 1996 年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻を修了し、97-98 年にイタリア政府給費留学生として Accademia de arti de Milano（BRERA）で学び、2000 年に同大学院博士課程終了、現在に至る。95 年からグループ展に参加し、99 年から個展を開始、ステップスでは初個展となる。

次に目を引くのはその形状である。植物を形成したとしても、リアルに植物を模倣するのではなく、植物が持つ雰囲気大切にしている。これは彫刻の基本でもある。レリーフに見える作品も起伏が生じているし、アクリル板を何枚も張り合わせて中にインクで絵が描いてある作品さえも、決して絵画ではなく彫刻の技法で為されている。

中澤は展覧会を「これも、すべて同じ一日」と題し、大理石/ブロンズ、アクリル/インク、磁土/アラバスター/ブロンズ、大理石/ガラス、アラバスター/ブロンズ/ガラス/アクリル、大理石/ガラス/ブロンズ/アクリル、アラバスター/ブロンズと、様々な素材を組み合わせて、全く異なる形状を持つ「彫刻」を 19 点展示した。

つまり多岐に亘る作品群は、総て彫刻であることを忘れてはならない。では、彫刻とは何か。平面か立体ではない。油彩で盛り上がってもそれは絵画であると同様に、平面であっても彫刻であることは成立する。カービング、モデリングといった技術のことではない。土台がある、素材を加工するという物質的な問題でもない。

まず驚くのは、その技巧力である。極限まで素材を削ぎ落とし、オーナーの吉岡まさみがブログで指摘した通り「繊細さと強靭さが両立して創り上げる空間」性である。よく見るとその素材でなければならない理由が理解できる。他の素材であれば、この質感は生まれないのだ。

彫刻はこれまで素材と重力との格闘が総てであった。しかし中澤の作品を見ると、彫刻とはもっと根源的な問題を抱えているのではないかと思えてくる。既存の価値観を変容し組み替えて新しい価値観を生み出すこと。ここに彫刻の本質を考察する鍵が隠されている気がしてならない。

